

## 《研究ノート》

### 伝記の陥穽

——ケンブリッジ大学出版局版D・H・ロレンス  
伝第一巻をめぐって——

井上義夫

ロレンスの伝記の決定版らしきものが出版されることは早くから知られてゐた。著者のジョン・ワーゼン(John Worthen)が自ら『D・H・ロレンス・レビュー』(D. H. Lawrence Review)に二度にわたつて寄稿し、新資料の一部を紹介しつゝ、近刊の出版に触れてゐたからである。進行中の著書を謂はば宣伝することが異例なら、一人の人物の伝記が三巻に分たれ、各々の執筆責任者を異にすることもまた異例である。一九九一年八月に出版されたその第一巻は本文四六一頁、総頁六二六頁から成る。この巻のみでも、現在までに出版されたロレンス伝のうちで最も大部なハリー・T・ムーア(Harry T. Moore)による『愛の高僧』(The Priest of Love)<sup>(3)</sup>にほぼ匹敵する。なるほどフランス人の研究者エミール・ドゥラヴェネ(Emile Delavenay)は、一八八五年から一九一九年までのロレンスの生活と作品に關して八五四頁に上る著作を著したが、その続篇は未だ現れ

てゐない。例へさうなつた場合でも、ケンブリッジ大学出版局(Cambridge University Press)による今回の伝記が史上最も長いロレンス伝になることは恐らく確実なことと思はれる。

ジョン・ワーゼンによる第一巻は、一八八五年から一九一二年まで、フリーダとガルダ湖畔ガルニャーノ(Garignano)に滞在して『恋しい息子たち』(Sons and Lovers)を完成させるまでの時期を対象としてゐる。

いま記述の順に従ひこの巻の長所を列記すれば、第一にロレンス家とビアドゥスル家(the Beardsalls)をめぐる家系図が、ケンブリッジ大学出版局全集(以下『全集』と呼ぶ)の書簡集第一巻のそれに較べ、より詳しく正確になつたことが挙げられる。ロレンスの母方の祖父の没した月日、祖母の没年、月日等が追加されたし、父方の先祖等も細かく記されてゐる。一体伝記執筆のためのこの種の基本的作業が、ロレンスに関する限り、一九八〇年の出版になるロイ・スペンサー(Roy Spencer)の著書『D・H・ロレンスの郷里』(D・H・Lawrence Country)まで行なはれなかつたことは、奇異なことであつた。ロレンス自身の洗礼記録とその父母の婚姻証明書は早くから印刷に付されたが、これを除けば、ハリー・T・ムーアなどは公的記録を閲した痕跡を一切残してゐない。彼はなるほどロレンスの書簡の整理等、地道な作業にも従事したが、こと伝記に

関する限り、恐らくは國勢調査センサスをも参照しなかつたと思はれる。『全集』版書簡集の編者は、当然のごとくこれを調査したものの、ロレンスの両親の出生、死亡、婚姻証明書を除き、想像するに専ら國勢調査に拠り家系図を作成したため、場合により生年に一年の誤差が生じることがあつた。十年毎に四月に行はれる國勢調査の年齢記載は、当然四月を境に一年の異りを生んだからであるが、新しい伝記の第一巻は、多分五ないし六件につき、証明書を入手したと想像できる。

尤も何事につけ人の為す所に完全といふものはない。ロレンスの母リディア (Lydia) の姉エマ (Emma) の生年が一八四九年とされてゐるのは誤りで、本当は一八四八年十一月十二日生れ。妹のエレン (Ellen) の生年一八五五年も然りであり、事實は一八五四年六月十四日。ロレンスの長兄ジョージの生年一八六七年は明らかな誤植で、一八七六年が正しく、九月二十六日に生れてゐる。さらに一八六八年十一月十九日生れと記載されてゐるエイダ・ロウス (Ada Rose) は出生証明書によれば一八六七年十一月十九日生れであるから、証明書参照の件も少しく怪しくなるが、私自身が入手した証明書類の数も寥々たるものであるから、他にも誤りはあるかも知れない。

戸籍のない英国で、正確な日付と両親の職業、住所等に関する情報を得ようとすれば証明書類は殆ど唯一の情報源

であるが、これを入手するには一件当り五ポンド余の発行料が費り、多大な時間を要する。やがては、時と金と労力の解決する問題であり、要は例へ「ケンブリッジ大学出版局」の事業と言へども頭から信用してかゝらねばいゝのである。

第二に、この伝記により、ロレンスの父方の曾祖父に初めて光が当てられたこと(七一八頁)、第三に、ピアドゥスル家のシアネス居住中にロレンスの母リディアの母方の叔母の家族も同地に住んでゐた事実が発見されたこと(一三頁)、第四に、リディアの妹達の結婚相手の素姓がかなり明らかになつたこと(一七頁)、第五にロレンスのノッティンガム・ハイスクール時代の勉学状況が少しく判明したこと(八五一六頁)、第六にリディアの手紙と、彼女が創つたと思はれる詩が紹介されたこと(九七、一二八―九、一六〇、二五三、二六七)、第七に、ロレンスの「教員見習生」時代の俸給やイルキントン (Ilkington) の「養成所」への通学状況が判明したこと等が指摘できる。特に最後の点に関しては、友人・知己の回想が錯索し、一体ロレンスが週に何度「養成所」に通つたか判然しなかつた。ワーゼンの詳細な調査は、「一九〇四年三月」からロレンスは「週のうち五度、センターで半日を過した」(三五頁)とだけ書いたロイ・スペンサーが正確な資料を抄漁してゐた事実を裏書きすることになつたのである。

ロイ・スペンサーの著作は、何よりも第一にリディアの素性を劇的な形で明るみに出したこと、第二にロレンスの父親アーサーが泥酔漢でも無知蒙昧な坑夫でもなかつたことを証した点に、その大きな功績と特徴があつた。第一の点は資料で固められてゐるから既に反駁の余地がない。第二の点に關して、ジョン・ワーゼンは幾分含みを残しながらも、一九八一年にやはりケンブリッジ大学出版局から出されたロレンスの友人ジョージ・ネヴィル(Neville)の回想記が主張した、全うで勤勉な人間としてのアーサー・ロレンスの人物を肯定した。謂はばロレンスの父は、ここに晴れてその「冤罪」を雪ぐことになつたのである。

ロレンスがクロイドンで教職に就いたのちの記述(第二部と第三部)に關しては、第一にフォード・マドックス・ヘフナー(Ford Maxox Huefer)のロレンス宛書簡の紹介(二二二頁)、第二に「マチルダ」(“Matilda”)と呼ばれる草稿の紹介、第三に『ポール・モレル』(Paul Morel)のプロットに關するロレンスの構想の紹介(二七八―八頁)、第四に、ルイ・バロウズ(Louie Burrows)をロレンスに引き合せたのが妹のエイダ(Ada)であつた事実の指摘(二八八頁)、第五にこのエイダ等の教員免許試験の成績(二八、二九二頁)、第六にルイの手記の引用(三一五、三四〇頁)、第七にフリーダをめぐるオットー・グロスらの

書簡の原文の紹介(三七三―八〇頁)、第八にロレンスが大学のノートに書き込んだ詩“A Life History in Harmonies and Discords”の復元(四九五―九頁)、『白く孔雀』(The White Peacock)の初期草稿『リティシア』(Laithia)のプロットの紹介(一三九頁)等が、この著作における未公開資料の紹介として指摘できる。細部に立入れれば、この他にも初めて明された事実も少なくないが、中にもノッティンガムシャー・カウンティ・ライブラリの所蔵するインタヴュー録音を用ゐた点で、この書物は一九九〇年出版になるジェフリー・マイヤーズ(Jeffrey Meyers)のロレンス伝(8)とともに、特に若年期のロレンスを新たな光で照らし出す可能性を秘めたものであつた。D・E・ジェラード(Gerard)といふ、恐らくは同図書館に勤務してゐた人物によるロレンスの友人・知己のインタヴューが数多く残されてゐる事実を紹介したのは、一九八二年に出版された『D・H・ロレンス・ハンドブック』であつた。この紹介により、時宜に適つた地道な作業がロレンスの研究者の利用に供される道が開けたのであつた。

これを要するに、ジョン・ワーゼンによる著作は、従来マイクロフィルムで見ると見なかつた資料や新たに発掘された資料を全体に互つて用ゐた詳細な初期ロレンスの研究書である。その資料の総量は、無論画期的なエドワード・

ネールズ (Edward Neils) の三巻から成る資料集と注釈<sup>(10)</sup>には及ばぬし、かつて『D・H・ロレンス・レヴュー』誌に掲載されたジョージ・J・ジタルク (Zyranik) 編『ジェシー・チェインバーズの手紙』にも及ばない。エミール・ドウラヴネの初期ロレンス研究と拮抗する程度の総量であるが、いづれにせよこれらの資料を用ひつゝ、各々の記述の根拠を、様々な書物と資料によつて確認した、正当な研究者の心構へに則つた書物であることに変わりはない。この点が、一切注釈を付さない、それ故に個々の正当性を確認しようのなかつた『愛の高僧』との大きな隔りである。

このためジョン・ワーゼンの著書は、あたかも資料を繋げてゆけば自然に、若きロレンスの日々はかくのごとく描かれるといふ印象を与へる。本文中に示された書簡集の膨大な巻数と頁数の表示が主としてその原因であるが、無論それは錯覚にすぎない。ロレンス自身の書き残した文章と、彼を語つた文章の総和は、真実想像を絶するほど多い。この著作自体の量とその量との比較は本来意味をなさないし、その比率を語る適切な比喩も思ひ浮ばない。肝要なことは、ロレンスの伝記執筆者は、自己自身の生きなかつた近代の一時代を語る歴史家と同じ立場に立たされるといふことである。参照できる「事実」は無数にあり、その社会は長い過去を引摺り、しかも確実に変化してゆく。その様を描くとき、彼は結局一つ／＼の洞察の周辺に「事実」を配置す

るしかない。或る洞察は「事実」によつて覆され、それによつてまた別の洞察を生み、或る洞察は自己増殖しながら他の洞察を包み込む。

ジョン・ワーゼンは十頁目に、「自伝小説」と言へど信じるに足りぬ、と宣言する。この正当な洞察は、二頁あとにロレンスの母の家系を述べる件りで怪しくなる。リディアの父方の家系は比較的「裕福」であつたといふロレンス自身の書簡中の言葉を本文中に引用したのち、ビアドゥスル家には、「昔、町(ノッティンガム市)の豊かな皮革業者のなかでも最も豊んでゐた」といふ話が多いといふ文章が引用符つきで続き、しかし彼らは「レース産業が破滅したときに零落した」といふロレンスの書簡が引かれる。中ほどの文章の出典は、註に示されて、「マチルダ」と呼ばれるロレンスの小説であると判明する。この作品から長い引用がなされるのは、私の知る限りこの著作が初めてであるが、別の場所でも述べたやうに、この作品もまた『恋しい息子たち』同様、その記述を伝記的事実として信じることに危まれる「小説」である。仮りにさうするのなら、私達はロレンスの母リディアの父ジョージの曾祖父は、貴族の娘と結婚し、その息子の代にこの一家は皮革業から紡績業に転じ、さらに一代下つた「ウィリアム」は醸造業者の娘を千ポンドの持参金とともに娶つた、といふ風に長々と記すことができる。さすがにワーゼンはさうすることは控へて、

この小説の一部分を、ピアドゥスル家に伝はる「話」として紹介するのであるが、ロレンスの母方の先祖については、ロイ・スベンサーによる調査とステイヴン・ベスト (Stephen Best) によるジョン・ニュートン (John Newton) に関する調査 (ワーゼンはこれを参照してゐないやうである) 以上に、確定的なことが何も解つてゐない以上、この種の紛はしい記述は避けるべきであらう。

一体調査の行き届かぬ箇所をロレンスの作品によつて語ることは、従来のロレンスの研究者の通弊の如きものであり、その最も著しい例として『恋しい息子、若きロレンス』を挙げることができるが、ワーゼンもまた特にフリーダとのドイツ逃避行以降、『ミスター・ヌーン』 (Mr Noon) を少しく援用しすぎる嫌ひがある。この小説の起筆時期は、一九二〇年五月以降、フリーダとの関係に題材を得た部分<sup>15)</sup>は、一九二一年二月以降に書かれたと推定されるから、現実の出来事と小説執筆との間には九年近い隔りがあり、この間には無論フリーダとの関係自体が変質してゐる。ロレンスの大学時代を『虹』 (The Rainbow) のアーシュラ (Ursula) のそれによつて語ることと同じく (一八一—二頁)、不適切かつ危険なことと思はれる。

この程度のことは看過し得る些細なことではない。肝腎な点は第一に、ロレンスと母親との関係についてワーゼ

ンが又しても「ロレンス神話」をなぞつてゐるといふ点である。七歳までのロレンスとその両親を扱ふ第二章で、ワーゼンは早くも、夫に対するリディアの性的な反撥と嫌悪感が父親に対するロレンスの憎悪と反撥に対応してゐると書く。一九一一年十一月十六日 (消印) のロレンスの書簡中の父親に対する愛情を表明した言葉を引用して、それが「事実上」 (‘Practically’) 二十六年間のうちで最初の父親への「同情」 (‘fellow-feeling’) の印であり、「恐らく」母親の死の翌年から、父親への憎しみを克服する過程が始つたと述べる (六〇頁)。この段階で二十六歳までのロレンスを一色に塗りつぶすことは好しくないし、「事実上」といふやうな言葉の用ゐ方には心すべきであるが、いづれにせよこのやうに言明することは、鮮明な一つの見解を打出したことを意味する。なるほど父親を蔑ろにするロレンスを回想した友人・知己の文章には事欠かぬが、逆に父親への愛情を明かす挿話がないわけでもない。父親のために茸を採し、チェインバーズ家の息子たちとこれを奪ひ合つたあと、「お母さんのためにお父さんを嫌はねばならない」と語るロレンスと、ダンスの巧い父親を自慢するロレンス、いづれも十五、六歳の頃の挿話であり、メイ・チェンバーズによつてこれらの回想文を、然るべき箇所引用することによつてロレンスの像は随分と変る筈であるが、ワーゼンはダンスの巧みなアーサー・ロレンスに関連して、注のなか

で後者を採り上げるだけであり、しかもロレンスの態度について触れることをしない(五一―二頁)。

アーサーが家人に暴力を振ふやうな男でなく、逆に優しい心の持主であつたことは力説されるものゝ、リディアの係累と人となり、ロレンスと彼女の關係は、不確かな「ロレンス神話」を継承してゐるのである。例へば冒頭頁で、ワーゼンは乳母車に乗せられた嬰兒ロレンスの写真に触れ、その素晴しい衣服は「多分リディア・ロレンスの豊かな姉妹によつて提供された」と何の根拠も示さずに述べる。さらに一八九九年十一月までに、中古ピアノの購入代金として六ポンドが支払われた事実を記すワーゼンは、その脚注(三九頁)に、一八九六年二月、リディアが十ポンドの株券を購入したこと、同年十二月に彼女の妹のエイダが「比較的」羽振りのよいフリッツ・クレンコウ(Fritz Krenkow)と結婚することになつてゐたこと、当該株券は、彼女の姪のエセル(Echel)の夫となるマックス・ハンガー(Max Hunger)の関連会社の株券であつたかも知れぬこと、一八九六年二月には、彼女は「多分」長男を軍隊から受け出すために貯金をしてをり(同年十一月、そのために十八ポンドが支出された)、株券購入はその金銭を「安全に確保」しておくためのものであつた、等々と記すのである。長男ジョージの軍隊からの受け出しの件は、すでにロイ・スペンサーが発掘した事実であるが(二十頁)、中古ピアノと株券

に関する事実は興味深い新資料である。ワーゼンがこれを、リディアの弟妹の裕福さに結びつけようとしてゐることは、同じ脚注に、株券購入代金は、「注意深い貯蓄といふより突然の恩寵(“Windfall”)”といふ「印象を与へる」(“sug-gest”)と書いてゐることからも、或いはピアドゥスル家の娘達が殆んど皆結婚して裕福になつたといふ書き方がしてある(一七頁)ことから明白である。いまその一つ／＼を問題にする余裕はないが、これらはいづれも目下のところ婚姻証明書の記載事項以外には確認する資料のない不確かな情報にすぎない。例へば一八八〇年初めにリディアが金銭と子供達の衣服の援助を受けてゐたのは「ほぼ確実に」リディアの妹のネリーである(一七頁)と書かれる重大な文章の根拠は示されないし、一八七七年に結婚したネリーの結婚相手が最初“warehouseman”であつたものゝ、「のちにレース工場主」になつた(一七頁)といふその時期も明示されない。

ところで一八七一年の国勢調査によれば、十七歳のリディア(ロレンスの母)と十六歳のエレン(ネリーのこと)、十四歳のレティス(エイダ)は「レース糸抜人」として働き、十年後の一八八一年にも、五十二歳のリディア(ロレンスの祖母)は「家政婦」として、二十四歳のレティス以下十三歳のエイダ・ロウズまで四人の子供達が工員として働いてゐるのである。こゝで生じる疑問は、もしネリーが

一八七七年に裕福な男性と結婚し、一八八〇年代の初めにロレンス家に金銭と子供服の援助をしてゐたのが「ほぼ確実」なのであれば、何故彼女の五十二歳の母親や十三歳の妹が、一八八一年にも僅少な俸給を貰つて働かねばならなかつたかといふ疑問である。「恋しい息子たち」第一章、第九章の記述からも想像できるやうに、結婚のためには花嫁の側からの支出も不可避となる。一体ネリーは、この支度金をどこから得たか――。

こゝで発想を逆転すれば、一八七五年十二月にリディア自身が豊かな「採炭請負人」すなわちアーサー・ロレンスと結婚したからこそ、二年後に妹のネリーは人並みの結婚をすることができたと考へられなくもないのである。同様に末の妹エイダ・ロウズの一八九六年十二月二十六日の結婚についても、彼女の結婚に際して「突然の恩寵」のごとくロレンス家に大金が転り込んだから一八九六年二月にリディアは十ポンドの株券を購入し、十一月に十八ポンドを支払つて長男を受け出すことができたのではなく、ロレンス家にそのやうな収入が入る時期だつたからこそエイダ・ロウズは結婚できたとも考へられるのである。一体、娘の婚姻証明書に全て「技師」といふ虚偽の職種を載せるジョージ・ピアドゥスルと、年齢を五歳若く記載しなければならなかつたエイダ・ロウズが――因みにワーゼンが、「二十八歳のエイダが二十四歳のやうに見せ」（十七頁）と書い

てゐるのは、前述した理由により誤りであり、彼女は当時二十九歳だつた――二十五歳の「商人」であるクレンコウに、私の家は貧しいからと持ちかけて、結婚式の十ヵ月前から前月までに、少なくとも十八ポンドの援助を受けることなど想像できるであらうか。結婚後の援助についても概ね英国の家計は男性の意のまゝになることが多いのである。

これらは無論私の臆測であり、単に金銭の問題でしかないが、リディアの「裕福な」姉妹によるロレンス家への援助といふ風説は、ピアドゥスル家の「由緒ある」家系とともに、恐らくリディア自身に発生源をもつ「神話」の重要な構成要素をなしてをり、それは必然的に、一種高潔で知的な彼女の人となりと、母親との絆に縛られた息子といふ別の局面に発展してゆく。ワーゼンがリディアのものと思しき詩を発見したのは、そのやうな執念の産物かもしれないが、彼女の人となりを言ふワーゼンは、「立派で、いつも黒い服を着、『小柄で、感じがよく、控へ目な』といふウイリアム・ホブキン(Hobkin)の言葉をまづ引用し(五頁)、『物静かで控へ目な淑女のやうな』本性といふロレンスの妹エイダの言葉に頼り(一五頁)、以降一貫して、俗事に超越し、黙々と何かに耐へるやうな女性としてのリディアを印象づける。さらに念を押すやうに、巻末にロレンス

自身による自伝的文章を列挙し、晩年の文章が事実と反するといふそれ自体は概ね正しい評言を記す序でに、母親を「俗物」と呼んだロレンスの言葉をも帳消しにしてしまふ。この立場は、普通リディアの特性とされる「成功」ないし「階級上昇」志向を当時の「何千もの労働者階級の女性」のゴールであつたとし、「生協婦人組合」で推奨されたことだと一般化するところにも表れてゐる(七一頁)。後者は、ロレンスの長兄の長男ウィリアム・アーネストによれば、[学校の教師や医者やその妻]の団体で、「社会主義」など眼中になかつたリディアが「自分のエゴ」のために運営したことになるから、ワーゼンの一般化は間違ひとも言へないが、前者は容易には首肯しがたい。といふのも、ロレンスと一緒にノッティンガム・ハイスクールの奨学生試験の勉強を「させられた」<sup>(19)</sup>アーサー・テンブルマン (Templeman) の回想によれば、彼もその母親も、ボヴェイル小学校 (Beauvale School) の校長から受験勉強の話をもちかけられたとき何のことか解らなかつたと云ふし、同じ級友の J・C・P・テイラー (Taylor) の<sup>(20)</sup>回想によつても、試験に落ちたテンブルマンは、見方によつては小学校校長とリディアの都合で、ロレンスと一緒に望みもしない受験勉強をさせられたと解釈できなくもないからである。

なるほどリディアは多弁ではなかつたが、メイ・チェインバーズ、デイヴィッド・チェインバーズ、ジョージ・ネヴ

イル、アーネスト・ウィリアム・ロレンス等の回想に見る限り、隋分と辛辣で、づけ／＼物を言ふ女性だつた。他人の感情など忖度せず、まづ自己を優先させるやうな女性であり、息子に対する愛情にも多分に利己的なところがあつた。ワーゼンが印象づける女性とも、『恋しい息子たち』の母親とも本質的に異なつた女性であり、一言で言へば「俗な」人間である。従つてワーゼンが、彼女は「深い信仰を抱いた」人間であつたといふエイダの感想を引用することも、一九〇一年に次男が死ぬまで、「規則的に」讚美歌をピアノで弾いて歌つてゐた、と書くことも(二八頁)、特殊な見方に基くりディア像でしかない。エイダ自身、母親に似て卑俗な女性であつたから、彼女の回想を鵜呑みにすることは危険であるが、そも／＼リディアにピアノが弾けたのかどうか——。もし「規則的に」ピアノを弾き讚美歌を歌つたのであれば、いつか誰かが目撃して然るべきであるが、エイダの回想記にも母親がピアノを弾く場面は現れないし、他の回想記やインタヴューもまたさうである。スラム街に生れ、アーサーと結婚する迄、謂はば最低の生活水準を強ひられたリディアにピアノが弾けたとは考へ難いし、彼女が自ら教へることができないからこそ、娘二人をライト嬢 (Miss Wright) のもとに通はせてピアノを習はせた<sup>(21)</sup>と考へるのが理に適つてゐる。ワーゼン自身注記したごとく(五一七頁)、『白い孔雀』で母親がピアノを弾いたと言



つてレティが空騒ぎする場面と、「ピアノ」と題された詩だが、ロレンスの母親にピアノが弾けたかも知れないと思はせる薄弱な根拠なのである。

リディアの人は、ロレンスの彼女に対する関係を左右する。薄幸で「控へ目な」信仰深い女性を母親にもつ感受性豊かな若者の感情が、つねに母親との柵に堰止められるのは自然の勢ひである。事實はさうでなかつたから、ロレンスの若年期は通説よりもずっと明朗かつ快活であつたが、ワーゼンには、快々として楽しまぬ、あたかも『白い孔雀』の語り手シリルのやうなロレンス像を描く傾きがある。なるほどロレンスの類ひ稀な透視力や叡智が母親の家系に由来することは否定できないし、シリルに特徴的な一歩退いて人事を観察する態度が一体どこから生じたかを指摘することは、ロレンスを語る上で重要である。しかしそれを、母親の性格と生活態度の遺伝ないしは反映として説明する(二一九、一四五、一五〇頁)のは事実と反する。様々な人々の回想から浮上つてくるリディアは、自分の「居所と共同体の外部」にあつて、それから「距離を置き」、それらを「観察」するやう運命づけられた人物ではない。自分が現にゐる「世界の現実から切り離され」「自己意識の痛み」に苦しんでゐるのは、『恋しい息子たち』の主人公ガートルード・モレルではあつてもリディアではないのである。

さういふ女性が、「ロレンス神話」として流布した自己の出自に関する作り話を子供たちと周囲の人々に話して聞かせ、「豊かな」妹たちによる援助を仄めかし、身重な彼女を酔つた夫が締め出したために戸外で夜を明さねばならなかつたなどといふ話を、教員志望の若い女性達に聞かせ、次男の婚約者に対する怒りを露はにし、長男が結婚すると不孝な息子の身勝手をかきくどくやうなことをするであらうか？ロレンスを創作に追ひやつたのは、一つにはかういふ俗な母親を高潔で恵れない母親と思ひ込まされて育つた少年期と、その母親のために父親と父親の帰属する階級に背を向け、「彼女の」階級上昇の夢を果す役割を負はされた青年期の記憶が、彼自身のなかの父親譲りの温かい本性と衝突したからである。当然にも十五、六歳のロレンスは、母親を批判する言葉を口にし始める。さうでないやうな鈍感なロレンスの伝記など私らには無用の長物でしかないからであるが、ワーゼンはそれにも触れないし、十六歳の冬、肺炎のため生死の境を彷徨つた時期に、譴妄状態のロレンスが母親と彼の家族に対してどんな振舞ひに及んだかといふ、実に興味深いネヴィルの回想をも取り上げない。

それはしかし、ワーゼンの伝記における不作為による欠如部分でしかない。彼が積極的に述べた新説としては、一つには、叔父のウォルター・ロレンスによる息子殺害の事

件が「殺人者の甥」としての汚名をハイスクール時代のロレンスに着せ、そのためにロレンスの成績が急降下したといふ推説、二つには、ダックス夫人との初めての性体験を一九一一年に繰下げたことがまづ指摘できる。いずれも既に述べたロレンス観の帰結であるが、前者に關しては、仮にロイ・スペンサーが一九八〇年に初めて紹介したウォルター・モレル家の「事故」が、ハイスクールの評判となつてロレンスの勉強意欲を萎えさせるほどの大事件であれば、同じ学校に通つたネヴィルを含め、友人・知人などの回想に現れないことが不可解である。さらに同じロイ・スペンサーが調査した同校に於るイーストウッドから出た初の交換学生ロレンス・ワイルド(Wild)の成績に照しても、近代語六年の競争が激しかつたことは容易に想像できる(三一頁)。これに、スペンサーの指摘するリディアの息子に對する期待限度といふ要素(三二頁)を加へれば、最終学年のロレンスの成績不振は十分に説明できるで、殊更世評に敏感な内向的青年の印象を与へる必要もないのである。

第二の点は、母親の生前にもイーストウッドで評判の女権拡張論者と性的交りをもつほどに、ロレンスは大胆であつたか否かといふ問題に係はる。リディアは、ロレンスが型破りの社会主義者ウィリアム・ホブキン(Hopkin)と親密になるのを好まなかつた。<sup>(33)</sup> アリス・ダックスはそのホブキンさへたぢろがせるやうな女性であつたから、リディア

の生前にロレンスがこの女性と交渉をもつたとなれば、母親大事のロレンス像は壊れ始める。恐らくはそのために、ワーゼンは二人の關係が、リディアの死んだ翌年の一九一一年夏に始まつたと推定し(三一九頁)、ロレンスにとつての最初の女性はジェシーであつたとする。つまり、「イーストウッドのある既婚女性」によつて初めて女性を知つたといふ通説を覆すのであるが、この通説の根拠となつてゐるのは、ロレンスの女性關係に關する最も信頼できる友人ネヴィルの証言<sup>(34)</sup>であり、当該女性がダックス夫人であることにまづ疑問の余地はない。ワーゼンは、一九一〇年三月末、ジェシーがクロイドンのロレンスの下宿に來た時期にロレンスは初めて女性を知つたと仄かすが(二五一頁)、さうであれば何故この直後にダックス夫人がロンドンに現れ、恐らくはロレンスと同じホテルに投宿し、ロレンスがジェシーに宛て、「危ふく君を裏切りさうになつた」と書かねばならない事態が出来しかが説明できない。二人の間にはすでに性的關係があつたと想定するのが自然であり、一九九〇年に出版されたジェフリー・マイヤーズによる伝記はそれを一九〇八年の前半<sup>(36)</sup>とし、ドウラヴネは少なくとも一九一〇年夏以前と推定する<sup>(37)</sup>。

私は一九〇九年八月頃と考へるが、無論こゝはそのくだ／＼しい推論について記す場所ではないし、そも／＼事柄の性質上正確な時期を確定することは不可能である。しか

しワーゼンの推説が、一九一〇年夏とするキース・セイガの説をさらに遅くし、母親の死後、イーストウッドではなくシャイアブルック (Shirebrook) での出来事と推定する点で、特徴的な説であることは確かなのである。

ワーゼンによる伝記は、リディアの死を扱ふときに地肌を露はにする。ムアの紹介したロレンスとエイダによる安楽死説は、これを肯ふか否かにより半ばそのロレンス伝の性格が決まる試金石に他ならないが、ワーゼンは肝腎のこの場面を一刷毛で描く。看病の傍、ロレンスが認めたオイディプス・コンプレックスの表白例の如き手紙の一節を幾つか引用したあと、しかし今ロレンスがリディアに望むことは死ぬことだけであつたと云ひ、『恋しい息子たち』のポイル・モレルは、医師に臨終を早めるやう頼んで断られたため自分自身の手で事を処したと書き、続けて、一九一三年十二月に、ロレンスは、『恋しい息子たち』の記述に違はず、彼と妹が催眠薬を規定量以上に与へたと述べ、リディアは翌日に死んだと引取るのである(二七二—三頁)。

キース・セイガでさへ安楽死説を採用し、ロレンスと妹は母親の無益な苦しみに耐へられずミルクの中にモルヒネを入れ、母親は三日後に死んだ、と事もなげに書いたから、この説自体は奇とするにあたらない。しかし一九八〇年に出版されたセイガのロレンス伝は、想像するに出版社の企

画に限界をもつ「写真集」であり、ケンブリッジ大学出版局の詳細な伝記とは性質を異にする。十分な紙幅を与へられたワーゼンが、この問題を素通りして了ふのは一体どういふ訳なのか？

一九九〇年に出たマイヤーズのロレンス伝は、さすがに新しい資料でこれを扱つた。前記ノッティンガム・カウンティ・ライブラリーの二つのインタヴューがそれであり、各々、医師は規定量しか与へようとしなかつたが、ロレンスと妹は痛みを和げるために余分の量を与へたといふ彼らの友人アリス・ホルディッチ (Hoditch)、旧姓ホルルの証言と、ロレンスは医師に「何か与へて終らせてくれませんか」と頼んだが断られたといふ長兄ジョージの証言である。<sup>40</sup>ワーゼンの著作は、事によるとマイヤーズの著作の出版以前に既に印刷にかゝつてゐたかも知れぬが、彼が件の図書館の二件のインタヴューを知らなかつたとは考へ難い。事実、長兄ジョージの回想は注に言及されるが(五五〇頃)、奇妙にもワーゼンは、ジョージが毎晩母親を見舞に行つたと云ふのは、妹エミリーが兄は「ごく／＼稀にか」(so rarely) 顔を見せないと怒つてゐたことから、信憑性に欠けるとし、医師の件も信頼できぬかも知れぬ、と書くのである。

なるほど長兄のジョージに誇張癖があつたことも、彼と次兄が、ロレンスとは対照的に所謂「孝行息子」でなかつ

たことも事実である。しかしジョージの証言を退けるためには、リディアが倒れてのち死ぬまでの間に、彼が「一度も」イーストウッドを訪ねなかつたことが証されねばならないが、同じ図書館の収蔵する彼の長男のインタヴューによつても、ジョージがリディアの死の前日からロレンス家にゐたことは確かなことなのである。仮に百歩譲つて、ノッティンガム市に居住してゐた彼が母親の計報に接する迄一度もイーストウッドに行かず、従つて彼のゐる前でロレンスが医師に母親の安楽死を請うたのが事実でないとしても、その話自体は、アリス・ホルルの証言に照して疑へぬとするのが妥当であらう。つまり安楽死願望のことも、規定量以上の投薬のことも、誰憚ることない公然たる事実であり、ロレンスとエイダが秘かに決断する性質の事柄ではなかつた。

しかもロレンスに、切羽詰つてモルヒネを盛らねばならぬやうな母親に対する愛情と一体感が欠けてゐたことは、ワーゼンが書かなかつた当時の日常によつても推察できるのである。長兄のジョージが、母親の死の当日のロレンスの態度に激怒したのも、弟の酷薄な心を見透したからであるが、ワーゼンの一方的解釈は、母親の看病の際に書かれた戯曲『回転木馬』の扱ひにも現れてゐる。

カリフォルニア大学バークレー校の所蔵するこの草稿は、草稿への書き込みによると、ロレンスの死後、ハイデルベルク

のロレンス夫人の屋根裏部屋で発見された。つまりエルゼ・ヤッフエ (Else Jaffe) の家屋といふことであるが、この作品の執筆時期が、同じ書き込みと言ふ一九一二年ではなく一九一〇年頃であることは、「ブーツ・キャッシュ」(“Boots Cash”) の透しのある縦二〇・三センチ、横一六・四センチの上質紙に五枚ごとにローマ数字を打つ方式で書かれてゐることからも明白である。ロレンスが「説教用紙」と呼んだクロイドン時代の用紙であり、母親の看病中の執筆についてはワーゼンもこれを認め(二八二頁)、「そのような時期に」これほどの言語の活力で、彼の人生の痛切な事件に光を当てる作品が書かれたことは瞠目すべきことだと書く。そのちに、死に際この母親ヘムストック夫人 (Mrs Hemstock) は、疑ひの余地なく家族にとつて有害な母親として描かれてゐるといふキース・セイガの言葉を引用する。キース・セイガの評言は、実は、この戯曲の喜劇の骨格は作者自身の状況をアイロニックな明晰さで見ることが可能にしたが、この明晰さこそが、実生活のロレンスに欠けてゐたとし、埋葬の翌日に「私の恋人のなかの恋人が去つた」といふ書簡の引用に続くもので、『回転木馬』の母親は当時のロレンスとは正反対であると云ふ趣旨の指摘である。さういふ言ひ方をするなら、逆にロレンスには創作に示されたやうな明晰さがあり、書簡はそれを糊塗する手段だつたと言ひ切つた方が真実に近いと

私は考へるが、いづれにせよワーゼンは、ヘムストック夫人はリディア・ロレンスとは非常に異なると書き、彼女が方言で自己の生活を語る諷刺の才のある労働者階級の婦人だと述べて、別の問題に移るのである。

しかし、労働者階級の婦人であるか否かは別にして、死の床にある母親を看病するロレンスを書いてゐた戯曲は、「来る日も来る日も、昆虫のやうに上を向いて」寝たきりのヘムストック夫人の五百ポンド幾許の遺産をめぐり、彼女の娘と看護婦、二人に言ひ寄る男達が展開する「ドタバタ喜劇」なのである。当然のやうにそこには、ロレンス自身に当る「母親つ子」ハリーとその父親、ジェシーに相当するハリーの女友達レイチエルも登場する。ロレンスは一方で、ヘムストック夫人に息子のハリーを悪しざまに言はせ、自らハリーの軟弱さを愚弄しつゝ、他方でヘムストック夫人の品性を野卑にすることにより母親を貶める。ヘムストック夫人はレイチエルを憎んでゐたが、ハリーを調教ふために彼女を使つたといふ娘の台詞も、五百ポンドの遺産により周囲の人々を振回すヘムストック夫人の在りやうも、痛烈な作者による母親の批判であり、復讐の始まりである。ハリーの父親が全うな人間として登場する点でも、これは興味深い作品なのである。

ヘムストック夫人が死んだ日と埋葬の日を扱ふ第五幕が、リディアの生前に書かれてゐたとは考へ難い。しかし明か

にそれは、「いつ終るとも知れぬ病室の看護」の際中に起筆され、恐らくは母親の死後一週間ほどのうちに完成したのである。ロレンスといふ作家は一筋縄ではゆかない。残酷さとこの上ない優しさの間で分裂した人間であつた。

ワーゼンの伝記は、さういふロレンスを、巷に隠れる陳腐な人間に見せてしまう。しかもロレンスがフリーダとドイツに発つ第十五章まで、殆ど常に或る時期のロレンスを述べる部分に、ずつと後に書かれたロレンスの作品が参照してくる。そればかりか各々の時期は項目別に扱はれる嫌ひがあるため、この伝記のロレンスには生命がない。一人の人間が生きてゐる気配を感じさせないから、著しく退屈である。ムアによる伝記は、読者の卑俗な関心を掻き立てつゝ、最後まで読者を捉へて離さなかつた。彼はむしろロレンスを書かず、ロレンスの生涯には、下世話の話がふんだんに詰まつてゐると教へた。そのこと自体は虚偽ではなく、偽りはロレンスをそれら情痴話の類から区別しなかつたところにあつたが、ワーゼンの伝記は、資料の推積によつて肝腎の若きロレンスを殺した。亡霊となつて現れ出たのは、またしてもオイディプス・コンプレクスにまともひつかれた寝れ果てたロレンスでしかなかつた。

一九八〇年にロイ・スベンサーが一冊の小著で「ロレンス神話」を互解させたあと、誰が十年余りのちに、味気ないロレンスが大規模な「伝記」の灰の下から「不死鳥」の

いよいよ蘇る様を捕獲し得たのであろう。それとて日記は心して書へんべし、読者もまた心して讀むべしとある。それが蘇密な資料に裏づけられてゐるとの印象を与へる機会が大にこれは一冊、その臨終のまた終つていふやうである。

- (一) John Worthen, "New Materials in the Biography of D. H. Lawrence—1: Catalogue of Some Letters and Postcards Relating to the Lawrence Family, 1897-1910," *The D. H. Lawrence Review* vol. 20, no. 3 (fall 1988): 269-74. "New Materials in the Biography of D. H. Lawrence—II: Catalogue of the Papers of Louie Burrows Relating to D. H. Lawrence," *The D. H. Lawrence Review* vol. 21, no. 1 (spring 1989): 47-53.
- (二) John Worthen, *D. H. Lawrence: The Early Years 1885-1912* (Cambridge: University Press, 1991).
- (三) Harry T. Moore, *The Priest of Love: A Life of D. H. Lawrence* (London: Heinemann, 1974; Pelican Books, 1976).
- (四) Emile Delavenay, *D. H. Lawrence: L'Homme et la Genèse de Son Œuvre (1855-1919)* (Paris: Librairie C. Klincksieck, 1969).
- (五) James T. Boulton, ed., *The Letters of D. H.*

*Lawrence*, vol. 1 (Cambridge: University Press, 1979).

- (六) Roy Spencer, *D. H. Lawrence Country* (London: Cecil Woolf, 1980).
- (七) G. H. Neville, *A Memoir of D. H. Lawrence* (Cambridge: University Press, 1981).
- (八) Jeffrey Meyers, *D. H. Lawrence* (New York: Alfred A. Knopf, 1990).
- (九) Keith Saga, ed., *A D. H. Lawrence Handbook* (Manchester: University Press, 1982).
- (一〇) Edward Nehls, ed., *D. H. Lawrence: A Comparative Biography*, 3 Vols. (Madison: The University of Wisconsin Press, 1957-9).
- (一一) George J. Zyraruk, ed., "Letters of Jessie Chambers," *The D. H. Lawrence Review*, vol. 12, no. 1, 2 (spring, summer 1979).
- (一二) 集英社「ロンドンズ 解説」『集英社キャラクター (曲歌の文庫) 4 'レキリスIII』 一〇五—一〇六頁、集英社、一九九一年。
- (一三) Stephen Best, "A Talent for Harmony: John Newton of Sneinton," *Sneiston Magazine* 16 (spring 1985).
- (一四) Philip Callow, *Son and Lover: The Young*

*Lawrence* (London: The Bodley Head, 1975).

- (15) D. H. Lawrence, *Mr Noon*, Lindelh Vasey, ed. (Cambridge: University Press, 1984) pp. xx-xxvi.
- (16) D. H. Lawrence: *A Composite Biography*, vol. 3, pp. 578, 572.
- (17) 拙稿『『ロマンズ神話』の在処』(『一橋論叢』第一〇五巻第三号)を参照せられたる。
- (18) William Ernest Lawrence, "Taped Interview with David Gerard," Nottinghamshire County Library.
- (19) A. E. Templeman, "D. H. Lawrence", La M 86, Department of Manuscripts, University of Nottingham.
- (20) J. C. P. Taylor, "Taped Interview with David Gerard," Nottinghamshire County Library.
- (21) 例へば一九三二年にかつてホエン・ハグズ家が借りてゐたハグズ農場 (the Hags Farm) にホーター・ド・ウラヴネを案内したエエタが、農場の住居を "mean" と呼び、彼女の母親がジェシーを冷遇した様を愉し気に語つたエミル (Emile Delavanay, "Sands and Scholarship," *The D. H. Lawrence Review*, vol. 9, no. 3 (fall 1976) 410) 一九三三年十一月、ルー・ブロウズが訴訟の気配を見せるや、

「長半復讐の機会を窺つてきつて、[ロマンズではなく妹の]私にその矛先を向ける決心をした」といふ類の云ひ方をしたエミル (Harry T. Moore and Dale B. Montague, *Frieda Lawrence and Her Circle* (London: Macmillan, 1981) pp. 64-5) 大学教授の義理の叔父フリッソ・ノットニコウが彼女には誇りであつたと想像せられたエミル (ibid., pp. 57, 68) 等なる判断する根拠である。或るはノットニコウが大学図書館の收藏する彼女の奇妙に投げ遣りで粗雑な筆蹟 (La B 203-211) を、彼女の実質が写真から致せる印象から睡つたエミルを思ふのである。

- (22) George Hardy and Nathaniel Harris, *A D. H. Lawrence Album* (Worcester: Moorland Publishing: 1985), p. 109. Ada Lawrence and G. Stuart Gelder, *Young Lorenzo: Early Life of D. H. Lawrence* (New York: Russell and Russell, 1966), p. 54.
- (23) D. H. Lawrence, *The White Peacock*, Part I, Chapter I. なほこの場面でノットニコウの母親がソープに挿けたるエミルを語つてゐる。
- (24) Warren Roberts, *A Bibliography of D. H. Lawrence* (London: Rupert Hart-Davis, 1963: 2d ed., Cambridge: University Press, 1982) E317,

320. I. なはりの詩の改稿に關しては拙論「ある難題——フリーダ・ロレンスの謎」(『橋論叢』第一〇二卷第三号)註四九の考察を参照せられたらう。
- (25) Jonathan David Chambers, "Memories of D. H. Lawrence," *Renaissance and Modern Studies* XVI, 1972: 7. 或うは一九一八年九月一一付ロレンス書簡 (*The Letters of D. H. Lawrence*, vol. 3, p. 282.)
- (26) Mrs. Alice Holditch, "Taped Interview with David Gerard," Nottinghamshire County Library.
- (27) *D. H. Lawrence: A Composite Biography*, vol. 3, p. 584.
- (28) *Ibid.*, p. 569.
- (29) *Ibid.*, p. 559.
- (30) *Ibid.*, pp. 569-70.
- (31) *A Memoir of D. H. Lawrence*, pp. 90-91.
- (32) テキサス大学の収蔵する『ホール・モレル』の草稿はこの殺害事件を扱つてゐるが、ホールにはいさゝかも世間体を気にする様子がなから。息子の「殺害者」である「ウォルター・モレル」に対し「陪審員は同情を示し、微罪を宣告された釈放後は「誰もが彼に優しかつた」と書かれるのである。(草稿三一三一—三二二頁)
- (33) Mrs. Alice Holditch, "Taped Interview."
- (34) *The Priest of Love: A Life of D. H. Lawrence*, p. 149.
- (35) *D. H. Lawrence: L'Homme et la Genèse de Son Oeuvre*, p. 703.
- (36) Jeffrey Meyers, *D. H. Lawrence*, p. 46.
- (37) Emilie Delavenay, "The Traumatic Experience," *The D. H. Lawrence Review*, vol. 12, no. 3 (fall 1979) 312.
- (38) Keith Saga, *The Life of D. H. Lawrence* (New York: Pantheon Books), p. 41.
- (39) *Ibid.*, p. 45.
- (40) Jeffrey Meyers, *D. H. Lawrence*, p. 64.
- (41) William Ernest Lawrence, "Taped Interview with David Gerard," Nottingham County Library.
- (42) *Ibid.*
- (43) D. H. Lawrence, *The Merry-Go-Round, The Complete Plays of D. H. Lawrence* (London: Heinemann, 1965).
- (44) Keith Saga, *D. H. Lawrence: Life into Art* (Penguin Books, Viking), p. 53.
- (45) *The Letters of D. H. Lawrence*, vol. 1, p. 200.